

安全データシート

作成日 2019年 2月27日

改訂日 2023年 6月19日 1/8頁

SDS No.1021-10140

1 化学品及び会社情報

化学品の名称 : 36272 USP Residual Solvents Class 2-Mix B
製造者名 : Restek Corporation
製造者住所 : 110 Benner Circle, Bellefonte, PA 16823, USA
製造者電話番号 : 1-814-353-1300 (Customer Service)
供給者名 : ジーエルサイエンス株式会社
供給者住所 : 東京都新宿区西新宿6-22-1 新宿スクエアタワー30F
供給者電話番号 : 03-5323-6611
供給者FAX番号 : 03-5323-6622
緊急連絡先 : ジーエルサイエンス(株)福島工場 品質保証課 電話 024-533-2244(代表)
製品コード : 1021-10140、1021-
整理番号(SDS No.) : 1021-10140
推奨用途 : 標準物質(日本産業規格(JIS)Q0030に定めるもの)
使用上の制限 : 試験・研究用

2 危険有害性の要約

GHS分類 : 特定標的臓器毒性(単回ばく露) : 区分2(呼吸器)
水生環境有害性 短期(急性) : 区分3

GHSラベル要素

絵表示又はシンボル :



注意喚起語 : 警告

危険有害性情報 :

H371 臓器の障害のおそれ(呼吸器)

H402 水生生物に有害

注意書き

[安全対策]

P260 粉じん/煙/ガス/ミスト/蒸気/スプレーを吸入しないこと。

P264 取扱い後は手をよく洗うこと。

P270 この製品を使用するときに、飲食又は喫煙をしないこと。

P273 環境への放出を避けること。

[応急措置]

P308+P311 ばく露又はばく露の懸念がある場合、医師に連絡すること。

[保管]

P405 施錠して保管すること。

[廃棄]

P501 内容物や容器を廃棄する場合は、都道府県知事の許可を得た専門の廃棄物処理業者に委託すること。

上記で記載がない危険有害性は分類できない、分類対象外または区分に該当しない。

3 組成及び成分情報

- 化学物質・混合物の区分 : 混合物
 化学名(又は一般名) : 36272 USP Residual Solvents Class 2-Mix B
 成分及び濃度 : 本製品は、8種類の溶剤成分を250～1450ppm含有したジメチルスルホキシド溶液です。詳細は以下の表に記載。

化学名(又は一般名)	濃度	化学式	官報公示整理番号		CAS RN
			化審法	安衛法	
n-ヘキサン	0.145%	C ₆ H ₁₄	--	--	110-54-3
ピリジン	0.1%	C ₅ H ₅ N	5-710	--	110-86-1
テトラリン	0.05%	C ₁₀ H ₁₂	4-574	--	119-64-2
1, 2-ジメトキシエタン	0.05%	C ₄ H ₁₀ O ₂	2-421 / 7-1321	--	110-71-4
トリクロロエテン	0.04%	C ₂ HCl ₃	2-105	--	79-01-6
クロロホルム	0.03%	CHCl ₃	2-37	--	67-66-3
ニトロメタン	0.025%	CH ₃ NO ₂	2-191	--	75-52-5
2-ヘキサノン	0.025%	C ₆ H ₁₂ O	2-542	--	591-78-6
ジメチルスルホキシド(DMSO)	>99%	C ₂ H ₆ OS	2-1553	--	67-68-5

4 応急措置

- 吸入した場合 : 空気の新鮮な場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。ばく露又はばく露の懸念がある場合、医師に連絡すること。気分が悪い場合は医師の手当てを受けること。
- 皮膚に付着した場合 : 石鹼と大量の水で洗い流す。刺激が直らない場合、炎症を生じた場合には医師の手当てを受けること。
- 眼に入った場合 : 水で数分間注意深く洗うこと。コンタクトレンズを外し、少なくとも15分以上大量の水で眼を洗う。直ちに医師の手当てを受ける。眼の刺激が続く場合、医師の診断、手当てを受けること。
- 飲み込んだ場合 : 口をすすぎ、直ちに医師の手当てを受けること。無理に吐かせないこと。
- 暴露した場合 : 医師に連絡すること。汚染された衣類は再使用する場合には洗濯すること。
- 急性症状および遅発性症状の最も重要な徴候症状 : 蒸気吸入により、一時的な呼吸器刺激性、めまい、衰弱、疲労、悪寒や頭痛などの症状を生じる。接触により眼や皮膚の発赤、痛み、皮膚の乾燥などが生じる。誤飲により腹痛やめまいが生じる。
- 応急措置をする者の保護 : 救助者は適切な保護具を着用すること。

5 火災時の措置

- 適切な消火剤 : 水噴霧、泡消火剤、粉末消火剤、二酸化炭素
- 使ってはならない消火剤 : 棒状水
- 火災時の特有危険有害性 : 火災時に刺激性もしくは有毒なヒューム(またはガス)が発生するため、消火の際には煙を吸い込まないように適切な保護具を着用する。
- 特有の消火方法 : 火元への燃焼源を断ち、適切な消火剤を使用して消火する。
消火のための放水等により、環境に影響を及ぼす物質が流出しないよう適切な処置をする。
- 消火を行う者の保護 : 消火活動は風上から行い、有害なガスの吸入を避ける。呼吸保護具を着用する。消火後再び発火するおそれがある。

6 漏出時の措置

- 人体に対する注意事項、保護具及び緊急時措置 : 屋内の場合、処理が終わるまで十分に換気を行う。漏出した場所の周辺に、ロープを張るなどして関係者以外の立ち入りを禁止する。作業の際には適切な保護具を着用し、飛沫等が皮膚に付着したり、蒸気/ミスト/粉じん/ガスを吸入しないようにする。風上から作業して、風下の人を退避させる。
- 環境に対する注意事項 : 漏出した製品が河川等に排出され、環境への影響を起こさないように注意する。汚染された排水が適切に処理されずに環境へ排出しないように注意する。

封じ込めおよび浄化の方法

および機材 : 適切な保護具をつけて処理すること。土砂・吸着剤などに吸着させて取り除く。密閉できる空容器に集めて適切に処分する。

7 取扱い及び保管上の注意

取扱い

- 技術的対策 : 高温物、スパークを避け、強酸化剤との接触を避ける。
屋内作業場における取扱い場所では、局所排気装置を使用する。
- 安全取扱注意事項 : 容器を転倒させ落下させ衝撃を与え又は引きずる等の粗暴な扱いをしない。
漏れ、溢れ、飛散などしないようにし、みだりに蒸気/ミスト/粉じん/ガスを発生させない。
使用後は容器を適切に廃棄すること。
吸い込んだり、眼、皮膚及び衣類に触れないように、適切な保護具を着用する。
取扱場所には関係者以外の立ち入りを禁止する。
- 衛生対策 : 取扱い後は手、顔等をよく洗い、うがいをする。
指定された場所以外では飲食、喫煙をしてはならない。
休憩場所では手袋その他汚染した保護具を持ち込んではない。

保管

- 適切な保管条件 : 直射日光を避け、換気の良い場所で密閉して保管する。
容器は直射日光を避け、冷蔵庫(2~10℃)に密閉して保管する。
- 避けるべき保管条件 : 高温の表面、火花、裸火。混触危険物質との接触を避ける。
- 技術的対策 : 換気のよい場所で容器を密閉し保管する。日光から遮断すること。
- 混触危険物質 : 強酸化剤、強塩基、強酸
- 安全な容器包装材料 : ガラス等

8 ばく露防止措置

- 設備対策 : 屋内作業場での使用の場合は発生源の密閉化、局所排気装置を設置する。
取り扱い場所の近くに安全シャワー、手洗い・洗眼設備を設け、その位置を明瞭に表示する。

管理濃度 作業環境評価基準 許容濃度 :

成分名	管理濃度	日本産業衛生学会	ACGIH TLV-TWA
n-ヘキサン	40 ppm	40 ppm	50 ppm
ニトロメタン	設定されていない		20 ppm
クロロホルム	3 ppm	3 ppm	2 ppm
1, 2-ジメトキシエタン	設定されていない		
トリクロロエテン	10 ppm	25 ppm	10 ppm
ピリジン	設定されていない		5 ppm
2-ヘキサノン	5 ppm	5 ppm	1 ppm
テトラリン	設定されていない		
ジメチルスルホキシド(DMSO)			

保護具

- 呼吸器の保護具 : 保護マスク
- 手の保護具 : 不浸透性保護手袋
- 眼の保護具 : 保護眼鏡
- 皮膚及び身体の保護具 : 保護衣・保護長靴
- 適切な衛生対策 : マスク等の吸着剤の交換は定期又は使用の都度行う。
取り扱い後は手、顔を良く洗いうがいをする。

9 物理的及び化学的性質

物理状態	: 液体
色	: 無色
臭い	: 無臭
融点/凝固点	: 18.5°C
沸点または初留点	: 189°C
可燃性	: データなし
爆発下限界及び爆発上限界	: データなし
引火点	: データなし
自然発火点	: データなし
分解温度	: データなし
pH	: データなし
動粘性率	: データなし
溶解度	: データなし
溶媒に対する溶解性	: データなし
<i>n</i> -オクタノール/水分配係数	
log Po/w	: データなし
蒸気圧	: データなし
密度及び/または相対密度	: 1.104 g/cm ³ (20°C)
相対ガス密度(空気=1)	: データなし
粒子特性	: 該当しない

10 安定性及び反応性

反応性	: 適切な保管条件下では安定。
化学的安定性	: 適切な保管条件下では安定。光によって変質するおそれがある。
危険有害反応可能性	: 適切な保管条件下では安定。
避けるべき条件	: 日光、熱、高温、混触危険物質との接触。
混触危険物質	: 強酸化剤、酸性化合物
危険有害な分解生成物	: 一酸化炭素、二酸化炭素など

11 有害性情報

急性毒性(経口)	: 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。
(ピリジン)	: ラットのLD50値として、891 mg/kg(ACGIH(7th, 2004),PATTY(6th, 2012)), 1,500 mg/kg(ACGIH(7th,2004)、1,580 mg/kg(ATSDR(1992))との報告。
(ニトロメタン)	: ラットのLD50値として、940 mg/kg(NTP TR461(1997)), 1,210 mg/kg(ACGIH(7th, 2001),DFGOT vol. 19(2003),NTP TR461(1997))との報告。
(クロロホルム)	: ラットのLD50値として、695 mg/kg(環境省リスク評価第2巻(2003)), 908 mg/kg(雄)、1,117 mg/kg(雌)(NITE有害性評価書(2008),DFGOT vol. 14(2000),ATSDR(1997),EHC 163(1994)), 440 mg/kg(14日齢)、1,300 mg/kg(若い成熟体)、1,200 mg/kg(老齢成熟体)(NITE有害性評価書(2008),IARC 73(1999),ATSDR(1997),EHC 163(1994)), 1,970 mg/kg(雄)(JECFA FAS 14)、2,000 mg/kg(雄)(NITE有害性評価書(2008),DFGOT vol. 14(2000),ATSDR(1997),EHC 163(1994))。
急性毒性(経皮)	: 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。
(ピリジン)	: ウサギのLD50値として、1,120 mg/kg(ACGIH(7th, 2004)、1,121 mg/kg(PATTY(6th, 2012))との原典の異なる2件の報告。モルモットのLD50値として、1,000 mg/kg(ACGIH(7th, 2004),ChemID (Access on January 2018)), 2,000 mg/kg(ACGIH(7th, 2004))との2件の報告。
急性毒性(吸入: 蒸気)	: 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。
(テトラリン)	: モルモットの蒸気で試験したLC50値 275ppm(8時間ばく露)(4時間換算: 389ppm、2.10 mg/L)(PATTY(2000))。
(ピリジン)	: ラットの1時間吸入ばく露試験のLC50値として、8,800 ppm(4時間換算値: 4,400 ppm)、9,000 ppm(4時間換算値: 4500 ppm)、4時間吸入ばく露試験のLC50値として、4,900 ppm(ACGIH(7th, 2004),PATTY(6th, 2012))との報告。
(トリクロロエテン)	: ラットの4時間吸入試験のLC50値として、4,800 ppm及び12,000 ppm、6時間吸入試験のLC50値として、5,918 ppm(4時間換算値: 7,248 ppm)(EU-RAR(2004))、1時間吸入試験のLC50値として、26,000 ppm(4時間換算値: 13,000 ppm)(NICNAS(2000),EU-RAR(2004))との報告。

- (クロロホルム) : ラットのLC50値(4時間)として、9,770 ppm(ATSDR(1997))、9,636 ppm(環境省リスク評価第2巻(2003))との報告。
- 急性毒性(吸入 : 粉じん、ミスト) : データ不足
- 皮膚腐食性及び皮膚刺激性 (ピリジン) : 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。
: ウサギを用いた皮膚刺激性試験において腐食性を示したとの記載(ACGIH (7th, 2004))。なお、本物質は刺激性を示す(PATY(6th, 2012),NITE初期リスク評価書(2007))、弱い刺激性を示す(NITE初期リスク評価書(2007))との報告がある。
- 眼に対する重篤な損傷性又は眼刺激性 (ピリジン) : 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。
: 皮膚腐食性/刺激性が区分1に分類されている。ウサギを用いた眼刺激性試験(OECD TG 405準拠)で、眼刺激性指数MMAS (Modified Maximum Average Score: AOIに相当、最大値110)が1日後に45.0で中程度の刺激性を示したとの記載(ECETOC TR48(2) (1998)) や、別のウサギによる試験で眼刺激性はグレード7(最大値10) で中等度の刺激性との記載(PATY(6th,2012))、本物質のウサギの眼への適用で強度の眼刺激性による障害が生じたとの記載(ACGIH(7th,2004))がある。
- (クロロホルム) : ウサギを用いた眼刺激性試験において、本物質を適用した結果、散瞳、角膜炎、角膜混濁を伴う強度の刺激性がみられ、4匹は2~3週間で症状が消えたが、1匹は3週間後以降にも角膜混濁の症状が残ったとの報告がある。また、結膜への軽微な刺激及び角膜の障害がみられたとの報告(EHC 163 (1994),NITE有害性評価書(2008))や、本物質は眼に対して刺激性を持つとの記載がある(産衛学会許容濃度の提案理由書(2005),CICAD 58 (2004))。なお、本物質はEU CLP分類において「Eye. Irrit. 2 H319」に分類されている(ECHA CL Inventory (Access on September 2015))。
- 呼吸器感作性 : 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。
- 皮膚感作性 : 危険有害性区分に該当する成分を濃度限界以上含有しないため、区分に該当しないに該当。毒性未知成分が0.1%以上なので、区分に該当しないから分類できないに変更。
- (トリクロロエテン) : 本物質は、日本産業衛生学会で皮膚感作性物質の第1群に分類されている。ヒトにおいて本物質に対する過敏症候群患者19名、本物質に12週間以上ばく露した健康者22名を対象に、本物質及び本物質の代謝物である抱水クロラール(CH)、トリクロロエタノール(TCOH)およびトリクロロ酢酸(TCA)のパッチテストを行ったところ、過敏症候群患者は全物質に対して陽性を示し、健康者は陰性であった。又、本物質に感作性があるとする、動物試験を含む複数の事例の報告(産衛学会許容濃度の提案理由書(2016))がある。なお、ヒトの本物質に対する皮膚感作性症状の報告は散発的であり、感作性発症は特異体質のヒトの症状であるので、本物質は皮膚感作性を有すると結論してはならないとの指摘がある(EU-RAR(2004))。
- 生殖細胞変異原性 : 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。
- 発がん性 (トリクロロエテン) : 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。
: IARCは、本物質はヒトで腎臓がんを生じること、並びに本物質ばく露と非ホジキン病及び肝臓がんとの間に正の相関がみられたことから、ヒトの発がん性に関し十分な証拠があり、実験動物でも本物質の発がん性について十分な証拠があると結論した上で、グループ1に分類した(IARC 106(2014))。その他、EPAがCaH (Carcinogenic to humans)に(IRIS(2011))、NTPがK1に(NTP RoC(14th, 2016))、ACGIHがA2に(ACGIH (7th, 2007))、EUがCarc. 1B1に(ECHA CL Inventory(Access on May 2017))、日本産業衛生学会が第1群に(許容濃度の勧告(2016): 2015年提案)それぞれ分類している。
- 生殖毒性 (1,2-ジメトキシエタン) : 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。
: マウスの器官形成期に経口投与した試験において、母動物に対して毒性が認められない用量において、仔に対する手足の奇形や脳脱出などが認められている(ECETOC TR.17(1985),TR.64(1995),TR.95 vol.2(2005),PATY(5th, 2001))。また、EU分類・R60, R61で生殖毒性カテゴリー2(区分1B相当)である。
- 特定標的臓器毒性(単回ばく露) : 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。

(ピリジン) : ヒトでは本物質は皮膚、眼、上部気道に対して刺激性を示すとの記述がある(NITE初期リスク評価書(2007))。症例としては、こぼれた本物質由来の蒸気を15~20分間吸入した女性が、会話障害を示したとの報告(ACGIH(7th,2004),NITE初期リスク評価書(2007))、ばく露濃度は不明であるが、本物質の入ったビンの破損により、蒸気を吸入ばく露した10人に頭痛、眼、鼻、喉の刺激、腹部の不快感、めまいが共通して認められ、うち数名は発熱、発汗、下痢、動悸、ふらつき、脱力感、悪寒、頭重感を訴えたとの報告(PATTY(6th,2012))、本物質の蒸気(濃度、ばく露時間は不明)にばく露した健康成人(複数)で、一過性の頭痛、めまい、嗜眠、頻脈、呼吸促進がみられたとの報告(ATSDR(1992),NITE初期リスク評価書(2007))がある。実験動物では、ラットの単回経口投与試験で、毒性症状は活動性低下、筋力低下、呼吸困難、鎮静、粗毛及び死亡であったとの報告(ACGIH(7th,2004),PATTY(6th,2012))、ラットの単回吸入ばく露試験で、毒性症状は流涙、鼻炎、不活発、過呼吸、鎮静、呼吸困難及び死亡であったとの報告(ACGIH(7th,2004))、ウサギの単回経皮ばく露試験で、500 mg/kg以上で嗜眠と体重減少が認められたとの報告(PATTY(6th,2012))がある。更にPATTY(6th,2012)には、実験動物一般に対する影響の記載として、全てのばく露経路でみられる主要な急性毒性影響は麻酔作用と刺激性であるとの記述がある。

特定標的臓器毒性(反復ばく露)

: 毒性未知成分が0.1%以上なので、分類できない。

(n-ヘキサン) : 本物質の職業ばく露により多発性神経障害、末梢性神経障害、多発性神経炎の発症を示す数多くの報告がある(環境省リスク評価第1巻(2002),EHC122(1991),ACGIH(7th,2001),DFGOT vol.14(2000),PATTY(4th,1994),ATSDR(1999))。また、本物質のばく露を受けたヒトを対象とした疫学研究も繰り返し実施され、その多くがばく露とこれらの有害影響との関連を認める結果となっている(環境省リスク評価第1巻(2002),産衛学会勧告(1993),DFGOT vol.14(2000),ATSDR(1999))。

(ピリジン) : ヒトについては、本物質をてんかん治療薬として使用した例で、1日あたり1.85~2.46 mLの用量で約1ヵ月に亘って経口投与した5人のてんかん患者で、投薬期間中に食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛及び腹部膨満感、頭痛、昏迷、倦怠感、抑うつ状態がみられた。また、その中の2例では血清総蛋白の減少や窒素血症、アルブミン尿症などが認められ、肝臓ならびに腎臓の障害が示されたとの報告がある。また、職業ばく露の例では約125 ppm(405 mg/m³)の濃度のピリジン蒸気を1日4時間、1~2週間に亘って吸入した労働者で悪心、めまい、頭痛、不眠、神経過敏、頻尿を伴った腰部や腹部の不快感、食欲不振がみられたとの報告がある。実験動物については、ラットを用いた13週間飲水投与試験において、区分1のガイダンス値の範囲内である50 ppm(5 mg/kg/day)以上でヘモグロビン・赤血球数・ヘマトクリット値の減少、100 ppm(10 mg/kg/day)以上で肝臓重量増加、区分2のガイダンス値の範囲内である250 ppm(25 mg/kg/day)以上で肝臓の色素沈着、500 ppm(55 mg/kg/day)以上で胆汁酸の増加、肝臓の慢性炎症・色素沈着、小葉中心性肝細胞の肥大・変性、1,000 ppm(90 mg/kg/day)で死亡、ALT・SDHの増加、性周期の延長がみられた。なお、雄では全例で腎臓のα₂uグロブリン陽性、500 ppm以上で腎臓の蛋白円柱・慢性炎症・鉱質沈着・再生尿細管、1,000 ppmで腎臓の顆粒円柱・硝子変性がみられている。また、ラットを用いた103~104週間飲水投与毒性試験において、区分1のガイダンス値の範囲内である100 ppm(7 mg/kg/day)以上で肝臓の胆管過形成、肝臓の色素沈着、区分2のガイダンス値の範囲内である200 ppm(14 mg/kg/day)以上で体重増加抑制、慢性腎症の増悪、肝臓の小葉中心性肝細胞の巨大細胞化、肝細胞の空胞化、400 ppm(33 mg/kg/day)で肝臓の小葉中心性肝細胞の変性及び壊死、腎臓の尿細管上皮過形成がみられている(NITE初期リスク評価書(2007))。

誤えん有害性 : 動粘性率が不明のため、分類できない。

1 2 環境影響情報

水生環境有害性(急性) : (毒性乗率×100×区分1)+(10×区分2)+区分3が39.000%であり、濃度限界(25%)以上のため、区分3に該当。

(ピリジン) : 藻類(*Selenastrum capricornutum*) 72時間EC50(速度法)= 0.10 mg/L(環境省生態影響試験:2017)。

(n-ヘキサン) : 甲殻類(オオミジンコ)での48時間LC50 = 3.88 mg/L(EHC122, 1991)

(テトラリン) : 魚類(ゼブラフィッシュ)の96時間LC50 = 3.2 mg/L(SIDS, 2008)。

(トリクロロエテン) : 甲殻類(オオミジンコ) 48時間EC50 = 7.75 mg/L(環境省環境リスク評価(第2巻):2003)。

(クロロホルム) : 藻類(クラミドモナス)72時間EC50 = 13.3 mg/L(ECETOC TR91, 2003, CICAD 58, 2004, EU-RAR, 2007)である。

水生環境有害性(慢性) : (毒性乗率×100×区分1)+(10×区分2)+区分3が13.00%であり、濃度限界(25%)未満のため、区分に該当しないに該当。

(ピリジン)	: 急速分解性があり(良分解性、BODによる分解度 : 92,94,0%(化審法DB:1998))、蓄積性がなく(LogKow : 0.65 (SRC PhysProp Database:2017))、藻類(Pseudokirchneriella subcapitata)の 72時間NOEC(速度法)= 0.01 mg/L(環境省生態影響試験:2017)である。
(クロロホルム)	: 慢性毒性データを用いた場合、急速分解性がなく(14日でのBOD分解度=0%、GC分解度=4.6%、難分解性(通産省公報, 1980))、魚類(ニジマス)の21日間NOEC = 0.059 mg/L(環境省リスク評価第2巻, 2003))である。
残留性/分解性	: 急速分解性のない成分が含まれる。
生態蓄積性	: データなし
土壤中の移動性	: データなし
オゾン層への有害性	: 本製品はモントリオール議定書の附属書に列記されていない。
1 3 廃棄上の注意	
残余廃棄物	: 廃棄においては関連法規ならびに地方自治体の条例に従うこと。 都道府県知事の許可を得た専門の廃棄物処理業者に委託処理する。
汚染容器及び包装	: 空容器を廃棄する場合、内容物を完全に除去した後に処分する。
1 4 輸送上の注意	
国際規制	
海上規制情報	: IMOの規定に従う。
UN No.	: 設定されていない
Marine Pollutant	: Not applicable
航空規制情報	: ICAO/IATAの規定に従う。
UN No.	: 設定されていない
国内規制	
陸上規制	: 国内法令の規定に従う。
海上規制	: 船舶安全法の規定に従う。
国連番号	: 設定されていない
海洋汚染物質	: 非該当
航空規制情報	: 航空法の規制に従う。
国連番号	: 設定されていない
緊急時応急措置指針番号	: 設定されていない
1 5 適用法令	
毒物及び劇物取締法	: 非該当
労働安全衛生法	: 名称等を通ずべき危険物及び有害物 別表第9 No.467(ピリジン), 520(ヘキサン) 作業環境評価基準(法第65条の2第1項) 危険物・爆発性の物(施行令別表第1第1号) 危険物・引火性の物(施行令別表第1第4号)
化管法	: 非該当
化審法	: 第2種特定化学物質(法第2条第3項、施行令第2条) 優先評価化学物質(法第2条第5項)
消防法	: 危険物第4類引火性液体、第三石油類水溶性液体(法第2条第7項危険物別表際1・第4類)
船舶安全法(危規則)	: 非該当
航空法	: 非該当
海洋汚染防止法	: 危険物(施行令別表第1の4) 有害液体物質(Y類物質)(施行令別表第1)
大気汚染防止法	: 有害大気汚染物質、優先取組物質(中環審第9次答申) 有害大気汚染物質(中環審第9次答申) 揮発性有機化合物 (法第2条第4項) 指定物質(法附則第9項、施行令附則第3項) 特定物質(法第17条第1項、政令第10条)

水質汚濁防止法	: 有害物質(法第2条、施行令第2条、排水基準を定める省令第1条) 指定物質(法第2条第4項、施行令第3条の3)
土壌汚染対策法	: 特定有害物質(法第2条第1項、施行令第1条)
廃掃法	: 特別管理産業廃棄物(法第2条第5項、施行令第2条の4)

1 6 その他の情報

引用文献等

ezCRIC 日本ケミカルデータベース株式会社

独立行政法人 製品評価技術基盤機構 化学物質総合情報提供システム(CHRIP)

化学品安全管理データブック、化学工業日報社

16918の化学商品、化学工業日報社(2018)

航空危険物規則書 第64版邦訳 等・他

記載内容の取扱い

全ての資料や文献を調査したわけではないため情報漏れがあるかもしれません。また、新しい知見の発表や従来の説の訂正により内容に変更が生じます。重要な決定等にご利用される場合は、出典等をよく検討されるか、試験によって確かめられることをお勧めします。なお、含有量、物理化学的性質等の数値は保証値ではありません。また、注意事項は、通常的な取扱いを対象としたものなので、特殊な取扱いの場合には、この点にご配慮をお願い致します。